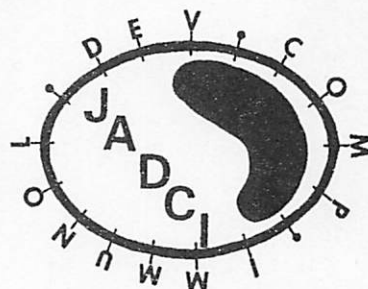


JADCI News

No.22

2002. 11. 22



The Japanese Association
for Developmental and
Comparative Immunology

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadci/index.html>

Office address:
Department of Biology,
Nihon University School of Medicine,
Itabashi-ku, Tokyo 173-8610

目次：

	頁
研究テーマとは	石井 照久 ----- 1
日本比較免疫学会第 14 回学術集会を終えて	黒澤 良和 ----- 3
日本比較免疫学会第 15 回学術集会へ向けて	山崎 正利 ----- 4
日本比較免疫学会第 14 回総会議事録	----- 6
第 9 回国際比較免疫学会について (ご案内)	和合 治久 ----- 7
会員名簿追加・変更	----- 8
新会員の入会を歓迎いたします (入会申込書)	----- 9

発行者：日本比較免疫学会会長 古田恵美子

事務局：庶務・会計 宍倉文夫

補助役員 大竹伸一 阿部健之

住所：〒173-8610

東京都板橋区大谷口上町 30-1

日本大学医学部生物学教室内

事務局 e-mail : jadcitnk@med.nihon-u.ac.jp

電話：03-3972-8111 内線 2291 (生物学教室)

Fax. : 03-3972-0027 (医学部庶務課扱い)

郵便振替：口座番号 00120-4- 18034

加入者名 JADCI

研究テーマとは

秋田大学・教育文化学部・自然環境講座

石井照久

私が比較免疫学会にきちんと入会して何年になるのだろうか？実はきちんと入会する前から（第1回の学術集会から）この会にお邪魔していた。私がこの学会の学術集会で初めて発表したのが1992年秋吉台で開催された第4回の時なのは確かだから、入会したのはその年なのかもしれない（記憶があいまいである）。とすると入会して丸10年たったのかと感慨深い。10年間1つの研究に打ち込めばかなりの成果があがるし、その研究については人に物を言えるくらいエキスパートになっているのが普通であるといわれるが、どうも私自身はそうっていないので悪いケースである。そこでその反省を踏まえ、自己分析しつつ研究テーマについて学会とのかかわりを含め述べてみようと思う。

1992年秋吉台（非常に思い出深い会であった；ホテルでの缶詰めと深夜のカラオケ大会など）での私の発表タイトルつまり比較免疫学会デビュータイトルは「チゴケムシ *Dakaria subovoidea* に群体特異性はあるのか？」であった。実は私は自分をホヤ屋であると思っている（発生学者でももちろん比較免疫学者でもなく）。学生時代を主に下田臨海で過ごし一貫してホヤを相手に研究をやっていた。しかもホヤの無性生殖がメインテーマで学位もそれで取得した。ではなんで比較免疫学会なのか、それは私の2人の師匠、横浜国立大学の種田保穂先生、筑波大学下田臨海の齊藤康典先生、のおかげである。種田先生についていた時代に本学会につれていってもらい（当時別の学会にはすでに参加していたが、本学会で初めて外国人の研究者、しかも免疫分野での大御所クラスの方と直にほとんど話せない英語でお話をした、お酒を飲んだ。こんな経験はこの学会ならではの贅沢である）、齊藤先生についていた時代に会員になった（1993年の藤沢での大会の時は大野乾先生の宿泊されるお部屋にあがりこんで同じ時間、場所を共有させていただけた、先生の馬のお話を今でも覚えている。こんな場面に遭遇できる、これこそ本学会の醍醐味なのだと思う。本学会は機動性に富み、これまでもたびたび海外から一流一線の研究者を招き講演をしていただいている、そういえば今年のパスキエ博士の講演もさることながらフルートの音色は実に心地よかった。番外の贅沢だ）。

本学会デビューの1992年私は大学院後期の2年生であった。種田先生と齊藤先生は研究室の兄弟の関係であり、そのお父さんは渡辺浩先生である。渡辺先生率いる下田臨海の発生研究室は、ホヤにおける群体特異性という免疫の基

本型とも言える現象の研究で世界に名をうった研究室である。その研究室に所属しているのだから無性生殖をメインとしていても群体特異性は気になっていたのである。そんなわけで 1992 年群体特異性のことを本学会で発表した。ただし材料は群体ホヤではなくて海産コケムシであった。なぜかというところ臨海で生活していると海の中のいろいろな生物がこれまた気になる、気になるのである。ここでこれまでの本学会での私の研究発表材料を振り返ってみると（共同研究者が 1st author であるものを含む）チゴケムシ 3 題、シモフリボヤ 6 題、マボヤ 5 題である。チゴケムシは海産コケムシ（すべて群体性）で、シモフリボヤは群体ホヤである。この 2 つの動物を使って主に群体特異性に関連した研究を行っていた。その後秋田に赴任したのをきっかけに単体ホヤのマボヤを研究するようになった。もちろんマボヤには群体特異性はないので、テーマは自己・非自己や造血に関する事に移っていった。これだけ聞くとまあ材料も研究テーマもそんなに浮気していない、と聞いていただけるかもしれない。が、しかし私は比較免疫学会では発表できないテーマも行っている。それは無性生殖であったり、水生付着動物の生息調査であったり、生殖異常に関する研究であったりする。いまでも古巣の下田臨海にいてホヤの無性生殖をやっているし、淡水海綿、淡水ウドンゲ、淡水コケムシの生息調査をやり、生殖異常をあてようとブラックバスやタニシにも手を染めている。こんな自分の研究スタイルにはやや自己嫌悪である。研究というのは大きなテーマをいろいろな角度から攻めるべきだと思うからである。たとえば自己・非自己認識という大きなテーマ、にさまざまな角度からアプローチし、そこに潜むメカニズムを解明していく。でも私にはなぜかそれができない。自覚している理由は、私の興味があちこちに広がってしまうから、目新しい事にとびつきやすい性格であるから、である（他にも理由はあるのかもしれないので是非御指摘下さい）。

広領域とか学際的とかが流行している。しかしこのことは自分の研究スタイルと符合するものではない。私の場合かなりのいきあたりばったりと一発ねらいのテーマが多い事を自覚しているからである。渡辺先生曰く「誘導のシェパードマン、とかのように何何の誰それ、あるいは誰それは何何（ちょっとニュアンスが間違っていたら渡辺先生お許し下さい）、と言われるように」たしかに渡辺先生はすごい『群体特異性の渡辺』『血管出芽の渡辺』だからである。以前こんな私でも研究人生をかけるようなテーマを探し当てる事ができるかどうかを渡辺先生にうかがったことがある、渡辺先生は「あせらなくても大丈夫、いつか見つかる」と言ってくださった。ありがたい。研究者の端くれとして給料をもらい始めて 9 年目である。なんとか研究人生をかけるようなテーマを探し出したいものである。

日本比較免疫学会第 14 回学術集会を終えて

8月26日から3日間、名古屋ガーデンパレスで開催された学術集会は、80名以上の会員の参加を得て盛会に終了しました。古田会長から2年半前に集会長を命ぜられて、私に最も不向きな仕事だと思いつつ、宍倉先生（事務局）と中村先生（プログラム委員）の全面的なご協力により、いつの間にか学会開催にこぎつけました。協賛企業の募集を含めて、ご協力頂いた方々、集會に参加頂いた会員の皆様に改めて感謝申し上げます。

集會では「防御戦略の比較生物学」と題した比較3学会合同シンポジウムが行われ、このような企画がない限り、聞く機会がなかったであろう様々な角度からの非常に興味あふれる話が聞けました。審良先生の「Toll-like receptor」の話は、座長の村松先生のご紹介通り私も含めまして皆様は1時間の講演分「賢くなった」という実感を持たれたと思います。そしてDr.Pasquierの参加は、バーゼル免疫学研究所で30年にわたって行われた「Origin and evolution of the vertebrate immune system」という彼自身の研究の総括であり、会の格調を高めました。そして何より彼のフルート演奏は感動を与えてくれました。集會の後、私は家族と共にLouisと2泊3日の白馬旅行（友人の別荘を借用）をしましたが、再度フルート演奏を聴かせて頂き感動を新たにしました。「私は日本語でのcommunicationはできないが、音楽はinternational languageだ」という彼のコメントは当を得たものでした。

最初一般講演の演題数が少なく心配しましたが、役員の方々の努力で多くの演題が集まってみますと実に比較免疫学の好きな方々の集団だと実感しました。今まで私は本学会に参加した際には勝手に飲んで酔払ってしまう側にいましたが、今回初めてサービスする側に回ってみまして、会員の皆様が如何にこの会を楽しんでいるかがわかりました。2晩にわたって実に夜遅くまで会話がはずんでおり、主催者としては心地よい満足感でした。Louisと一緒にいて気分がいい人物で、きっと何人かの方は彼との会話をenjoyされたことと思います。以上のように、非常に自己満足的総括ですが、この学術集會は成功だったと思います。現在、私自身は「抗体プロジェクト」を行っており、比較免疫学的研究からは遠のきつつあります。しかし、比較免疫学が対象とする世界が「宝庫」であることは熟知しております。この学会からキラッと輝く「珠玉の成果」が生み出されることを期待して、集會の報告と致します。

第14回学術集會長
黒澤 良和

日本比較免疫学会第15回学術集会へ向けて

第15回学術集会長 山崎正利
(帝京大学薬学部医療生命化学教室)

秋冷の候となりましたが、会員の皆様におかれましては、御健勝にてお過ごしのことと存じ上げます。

さて、明年の第15回大会は、帝京大学薬学部医療生命化学教室（事務局長飯島亮介、庶務担当 来生淳）で御世話させていただくことになりました。開催場所は東京都文京区本郷の東京大学構内、三四郎池横の山上会館で、期間は8月29日（金）、30日（土）の2日間を予定しております。

最近本学会も若い人の参加が少ないとか、新しい人の参加が少ない、開設当初の熱気が下降気味ではないかという話もちらほら聞きます。平成とともに歩んできた本学会も、来年は15年目という節目の大会ということになります。赤とんぼの歌に、『15で姉やは嫁に行き～お里の便りも絶え果てた～』とありますが、来年の記念すべき第15回大会が、こんな寂しい15年目にならないようにしたいものです。

ちなみに過去14年の一般演題数を調べたところ、第1回は29題、第2回は27題、第3回も27題、第4回は22題、第5回は21題、第6回は35題、第7回は28題、第8回は29題、第9回は20題、第10回は33題、第11回は25題、第12回は34題、第13回は21題、第14回は24題でした。ということは、だいたい毎年 26.8 ± 4.9 題で推移しており、演題数からは特に最近落ち込んでいるわけではなく、多少の増減はありますが毎年ほぼ一定のようです。

私の関連するS学会やR学会も若い人の参加が少ないとか、新しい人の参加が少ない、活動が下降気味で演題数、参加者数の低下に悩んでいます。斜陽化した状態とみるか、一定の評価を得た成熟状態とみるか意見の分かれるところでしょう。確かにいわゆる最先端分野や、明確な疾病対象のある分野はそれなりに人が集まり、活発だと思います。若い人は、自分の研究分野に近い、身近なことが対象（病気や食）になっている、ゲノムなどの最先端指向の、大きめの学会などに行きたがる傾向があると思います。

また本学会はいろいろな生物が対象になっていたり、生物の系統発生など広い範囲が対象なので、若い人にはなかなかとらえにくい面があるかもしれません。生物の進化や歴史など、きた道を回想し、興味を持つようになったら定年が近い、という法則があると某先生が言っていたが、してみると当学会は最初から若年寄集団だったということなのでしょう。確かに歳を重ねると、広い視野、高いところから物事を考えることができると思います。

本学会も昔昆虫少年、虫愛ずる姫君が多いと思いますが、今は昔ほど昆虫は

身近ではないし、外遊びも少ないし、ほかの遊びや刺激が多い世の中になってしまったので、昆虫少年も減少しているのかもしれませんが。外で遊び、考え、失敗し、学び、作業することが少なくなったことは、将来の自然科学者にとって悪いことはあっても良いことは何もないのではないのでしょうか。生き物の研究がどんなに細分化、物質化、最先端化しても、生物としての全体像に興味と知識がなければ、砂上の楼閣になるおそれがあると思います。それは病気を診るが、病人を診ない医師と同じではないのでしょうか。

学会をはじめとして、何事もただ大きければそれでよいというわけではないと思いますが、生物は大きいということで優位に立つようです。生物は時間の認識に関しては非常に苦手ですが、大きさの認識、把握は得意です。それは即生きること、捕食関係につながるから当然だと思います。自分より小さいものが攻撃の対象、食の対象になってきたのでしょう。

ライオンだってゾウやカバには一目置く。大きいものには、強さ、あこがれ、頼りがいを感じ、小さきものには、弱さ、いとおしさ、保護的な感情移入があるのでしょう。赤ちゃんが大人のように大きかったらつまらない。いやそんな生物の存続は怪しくなるだろう。

選挙でも大きい人が得らしい。アメリカの大統領選挙も身体が大きい候補がいつも勝つという。例外は前回のブッシュとゴアの戦いらしい。もっとも実際は僅差でゴアが勝っていたらしいので、生物の法則通りだったかもしれない。

エビの長い触覚も感覚器官というだけではなく、自分を大きく見せ、威嚇するのに大きな役割がありそうです。昔の弁士にみられたエビの触覚のようなカイザル髭に山高帽と高下駄、マントをひらひらさせ、手にはステッキ、何もかも大きく見せるための小道具なのでしょう。某国の最高指導者は、背を高く見せるためにシークレットシューズを履いているらしい。

戦争末期南方の戦地に赴いた兵士は、船の沈没に備えフカよけの赤いふんどしを携帯したという。ふんどしは身に巻き付けるのではなく、ひらひらと波間に流したらしい。そうすることによって、人間も波間に漂う大きな生き物にみえ、フカは攻撃しなかったのかもしれない。

でも日常生活からみた大きい生物（ヒト）には、大男総身に知恵が回りかねとか、ウドの大木とかあまりいいことはいわれていません。反対に山椒は小粒でもピリリと辛いとか、小よく大を制すなどといったりします。

日本比較免疫学会もいたずらに巨大化するよりも、適切なサイズでいいのかもしれませんが。来年も 26.8 ± 4.9 題でよろしく御願いたします。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

第 15 回日本比較免疫学会学術集会

期日 平成 15 年 8 月 29 日（金）、30 日（土）

会場 東京大学構内 山上会館

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

第14回日本比較免疫学会総会議事録

日時：平成14年（2002年）8月26日（月）午後5時00分～

会場：名古屋ガーデンパレス

会長の挨拶： 古田恵美子

議長選出： 古田会長

第14回学術集會長の挨拶： 黒澤良和

報告事項

(1) 会務報告（事務局：宍倉文夫）

JADCI News 発行状況について以下の報告があった。

News 20号（発行日：平成13年11月15日）、21号（発行日：平成14年3月12日）を発行した。次号（22号）は、平成14年11月の発行を予定している。

(2) 次期（第15回：2003年）学術集會について

（山崎正利次期学術集會会長代理：飯島亮介）

第15回学術集會は平成15年8月29日（金）～30日（土）、東京大学山上会館で開催される旨説明があった。

(3) 次次期（第16回：2004年）学術集會について（次次期学術集會会長：熊澤教眞）

第16回学術集會は沖縄において平成16年8月25日～27日開催予定、場所は未定と説明があった。

(4) ISDCI について

1 DCI 誌の Meeting Report について（山崎正利抄録委員代理：飯島亮介）

昨年度の学術集會 Meeting Report は DCI 誌 26(5)に掲載済み。今年度分は黒澤学術集會会長が Meeting Report としてまとめる旨説明があった。

2 ISDCI について（副会長：和合治久）

International Society of Developmental and Comparative Immunology (ISDCI) の 9th 大会がスコットランドのセントアンドルースにおいて 2003 年（平成 15 年）6 月 29 日（日）～7 月 4 日（金）に開催される旨説明があった。（資料配付、本誌 p.9 参照）

(5) 日本比較三学会合同シンポジウムについて（副会長：和合治久）

今年度の担当は日本比較免疫学会で、日本比較三学会合同シンポジウムは本学術集會開催期間中の 2 日目、8 月 27 日（火）午後 1 時～4 時 20 分に「防御戦略の比較生物学」と題して行われると説明があった（当学会からは、帝京大学の飯島亮介、東京歯科大学の中村弘明の両会員がシンポジストとして講演する）。また、合同シンポジウムについて 3 学会で合意された「日本比較 3 学会合同シンポジウム開催に関する基本的事項」（案）が読み上げられた。

(6) ホームページについて（HP 委員：阿部健之）

日本比較免疫学会のホームページの更新記録に関して報告があった。

審議事項

(1) 平成 13 年度の会計決算

(庶務・会計担当補助役員：大竹伸一、会計監査：友永進)

平成 13 年度会計決算の報告があった [総収入は 2,036,573 円 (前年度繰越金 1,119,074 円を含む)、支出総額は 494,215 円、次年度繰越金は 1,542,358 円]。次いで、4 月 15 日友永進会計監査、4 月 18 日茂呂周会計監査が監査をおこなった結果、収支共に適正に処理され関係書類も整っていた旨、友永が報告し、総会出席者により承認された。

(2) 平成 14 年度予算 (大竹)

次年度の予算の説明があり、総会出席者により承認された。



平成 14 年 8 月 26 日

和合 治久

第 9 回 国際比較免疫学会学術集会について (ご案内)

- 1) 開催時期：2003 年 6 月 29 日 (日) ～ 7 月 4 日 (金)
- 2) 開催場所：University of St Andrews
スコットランド、セントアンドルース (St. Andrews, Scotland)
- 3) 参加・発表等の登録について：プログラム、講演要旨締め切り、宿泊、受付等に関する詳細は、下記 web site で公表されている。国際比較免疫学会 web site (<http://www.isdci.org/meeting.htm>) からリンクされている。
(11 月 8 日改訂-事務局)

<http://www.st-andrews.ac.uk/~seeb/ISDCI/home.htm>

- 4) サテライトワークショップについて：7 月 5 日 (土) に Marine mammal immunology に関するワークショップが開催される。
- 5) 学術集会に関する問い合わせ先：
Val Smith 博士 (vjs1@st-and.ac.uk) あるいは
Mrs. Jane Williamson (Conference secretary) (jmcw@st-and.ac.uk)

会員名簿 (2002年6月8日版) 追加・変更 (その1)

新入会

荒木 亨介 ARAKI KYOUSUKE

- 1) 〒431-0211 静岡県舞阪町舞阪 2971-4
- 2) 東京大学大学院農学生命科学研究科
附属水産実験所
- 3) TEL. 053-592-2821
FAX. 053-592-2822
E-mail. karaki10@mail.goo.ne.jp
- 4) 魚類免疫学

野村 和弘 NOMURA KAZUHIRO

- 1) 〒799-0101 愛媛県川之江市川之江町
2257 番地
- 2) 愛媛県立川之江高等学校
- 3) TEL. 0896-58-2061
FAX. 0896-58-8990
E-mail. nomura-kazuh@esnet.ed.jp
- 4) 理科 (生物)

所属等の変更

HAN, SUNG-SIK HAN, SUNG-SIK

- 1) 5-ka Anam-dong, Sungbuk-ku, Seoul,
136-701, KOREA
- 2) Graduate School of Biotechnology,
Korea University
- 3) TEL. 82-02-3290-3424
FAX. 82-02-3290-3924
E-mail. sshan@korea.ac.kr
- 4) Insect Immunity-cellular immune reaction,
Antibacterial factor

本間 義治 HONMA YOSHIHARU

- 1) 〒951-8018 新潟市稲荷町 3460-55 (自宅)
- 2) 新潟大学医学部第3解剖学教室
- 3) TEL. 025-227-2062
FAX. 025-224-1767
E-mail. vivanat3@med.niigata-u.ac.jp
- 4) 魚類・円口類の胸腺活動と内分泌腺

無津呂 淳一 MUTSURO JUNICHI

- 1) 〒514-0102 三重県津市栗真町屋町 1653
アンセヌマガン・シャルム A101 号
(自宅)
- 2) 三重大学
サテライトベンチャービジネスラボラトリー
- 3) TEL. 059-231-5701 (自宅)
TEL. 059-231-5359 (内) 6713 (所属先)
E-mail. mutsuro@svbl.mie-u.ac.jp
- 4) 魚類の補体系、トキシコゲノミックス

中尾 実樹 NAKAO MIKI

- 1) 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1
- 2) 九州大学大学院農学研究院
- 3) TEL. 092-642-2896
FAX. 092-642-2894
E-mail. miki_n@agr.yushu-u.ac.jp
- 4) 魚類の補体系

沢田 知夫 SAWADA TOMOO

- 1) 〒755-8505 山口県宇部市南小串 1-1-1
- 2) 山口大学医学部 人体機能統御学講座
TEL. 0836-22-2202
E-mail. roretzi@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp
- 4) ホヤの血球細胞についての解析

高木 尚 TAKAGI TAKASHI

- 1) 〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉
- 2) 東北大学大学院
生命科学研究科生命機能科学専攻
- 3) TEL. 022-217-6677
TEL. 022-217-3683
E-mail. ttakagi@mail.cc.tohoku.ac.jp
- 4) 生化学

矢野 友紀 YANO TOMOKI

- 1) 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1
- 2) 九州大学大学院農学研究院
- 3) TEL. 092-642-2894
FAX. 092-642-2894
E-mail. yano_t@agr.kyushu-u.ac.jp
- 4) 水族生化学、魚類の補体系

新会員の入会を歓迎いたします。下記入会申込書をコピーしてご利用下さい。

入会金不要、年会費 3,000 円

入会申し込み頂ければ

送付先：日本比較免疫学会 (JADCI) 事務局

振替用紙をお送りいたします

〒173-8610 板橋区大谷口上町 30-1 日本大学医学部生物学教室内

(問合せは TEL: 03-3972-8111 (内) 2291 または

e-mail address: jadcitnk@med.nihon-u.ac.jp に願います)

入 会 申 込 書

このたび日本比較免疫学会に入会したく、下記の通り申し込みます。

年 月 日

日本比較免疫学会

会長 古田恵美子殿

氏 名 _____

同ローマ字 _____

所 属 _____

記

会員種別：個人会員

連絡先：(〒 _____) (所属先・自宅 一方を○で囲む)

TEL: _____ 内線 _____

FAX: _____

e-mail address: _____

専門分野: _____
